臨床実験報告

口腔底皮様嚢腫の一例

日本医科大学 解剖学教室 (横尾安夫教授指導)

小林 奏一
Soiti Kobayasi

東横病院耳鼻咽喉科

岡崎 俊雄 山口 浩
Toshio Okazaki Hiroshi Yamaguchi明石 了
Satoru Akashi

緒言

我々臨床医が比較的遭遇する嚢腫は、口腔底に発生する嚢腫性腫瘍として非常に多く次いで口腔底皮様嚢腫、その他稀には粘液嚢腫、血管腫、リンパ管腫、腺腫、唾液腺腫、thyreoglossische Zyste Gesichtspaltencyste 粉瘤の如きは極めて少い。最近我々は発語障害を伴っていない口腔底皮様嚢腫の一例を経験し、摘出手術を施行したので報告し併せて文献的考察を試みたので御批判を仰ぎたいと思います。

症例

患者： 8才♂

初診：昭和 34 年 3 月 5 日

入院：昭和 34 年 3 月 7 日

主訴：舌下部の腫瘍形成

家族歴：父方に高血圧の Belastung ある他は特記すべきものなし。

既往歴：日常元気で著患なし。

現病歴：学校で歯の検査時に歯科医より注意された程度で発語障害を伴わずに家人も全く気づかなかつた。

現症：体格、栄養、骨骼筋共に普通で、胸腹部、尿、血液像は正常でワッセルマン反応は陰性、その他聴器、鼻腔、咽喉頭には異常は認めず。

局所々見：舌を挙上させると口腔底に、実大の舌下正中線の両側に跨っている平滑柔軟な周囲と癒着のない腫瘤を触知し得。舌の運動障害は全くなく、口腔底粘膜の炎症々状もなく、顎下部側頸部のリンパ腺腫脹なし、双合触診によつて口腔内に軽度膨出する程度で顎下部筋組織を圧排しているのが余り著明ではない。尚齒列にも異常は認められず、穿刺試験を試みたが僅

図 1

少の乳液様物をみたのみで内容物の排泄は困難であつた。(図 1)

手術所見：嚢腫の略中央にワルトン氏管の前縁で之を損傷しない様に弧状に約 3 cm の切開を加え、帯黄白色の嚢腫壁を鈍的に剝離し始め、壁の側部、上部の癒着はなく容易であつた。嚢腫壁は弾力があり内容物の移動が認められるので鉗子で固定し深部に剝離を進。筋組織層との間は癒着がなく、舌下腺、顎下腺への癒着もなく、前正中部に於て若干の癒着があり、口腔底筋組織層の間より細長い径でつながっており鈍的に切断し口内法で完全の形のまゝで剝離摘出する事が出来た。(図 2 4.2×3.5×2.4 cm)

切開すると嚢壁は平滑で「乳状乾酪様物質」で充たされていたが、その化学的検査はしなかつた。組織像は嚢壁は重層扁平上皮で外部に結合織で閉鎖され、内容の充満せる所では粘膜は著しく菲薄となつている。然し毛髪、出牙は見出されなかつた。(図 3, 4)

術後経過良好で 2 日目で抜糸し、5 日目で退院した。

図 2

図 3

図 4

考按、総括

本症の発生については胎生学上より推論されて居り、病理組織学的所見より胎生期に於ける外胚葉残基に其基源を求むべき点に就ては異論なく、基源発生の局所問題に関しては未だ一致していない。Kaufman

(1884) 及び Ribbert (1898) は動物実験に基き囊腫形成に成功し、中胚葉中に外胚葉の残留して発生するものと主張した。v. Bergmann (1913) は胎生期に於ける腮装置の正中線融合部に於ける外胚葉の異常埋没を主張す。Hassel (1913) は両側の顎胞の異常埋没が原因として v. Bergmann 説に反駁し、Colp (1925) は大多数は v. Bergmann 説の如く第 1, 第 2 腮弓癒合の際に残留せる外胚葉より発生し、又少数のものに於ては無対結節の異常遺残埋没によるものと主張した。尚 v. Berhmann 及び Colp の説では胎生学的にも発生は可能性ない様に思われ、口腔底皮様囊腫の発生に対しては Hassel の顎胞説の如く、顎胞の発生部位及び両側下顎突起が正中線に於て融合する際、外胚葉の一部が埋没し、漸次發育と共に其位置を口腔底正中線に移変し来るものと思考せられて居るようである。かかる成立機転からして、大多数は小児期より存在し、青春期に至つて急速な發育をなし、性別に関係なく自覚症状が殆どないのが多く偶然の機会に発見せられる事が多い。

口腔底皮様囊腫の分類としては

(I) 病理組織学的には

- 1) 固有皮様囊腫、皮膚組織と全く同で、外側は結締組織層よりなり、毛髪、汗腺等の皮膚附属器官を有する。
- 2) 表皮囊腫、皮膚附属器官を欠如する。

(II) 位置的關係により

a) Gerard-Marchant, v. Bergmann の如く舌骨及び下顎骨との關係より

- 1) 舌下部皮様囊腫：頤舌筋間に介在し、下面は頤舌骨筋により境介せられる。
- 2) 頤下部皮様囊腫：頤舌骨筋下に存在す。

b) Klapp は口腔底筋肉層に対する關係より

- 1) 筋肉内側口腔内皮様囊腫：口腔粘膜及び舌を膨隆せしめる。
- 2) 筋肉外側口腔外皮様囊腫：頤下部に存在する。

c) Debounell は

- 1) 正中線皮様囊腫：頤舌骨筋と頤舌骨筋との間に存在する
- 2) 側方皮様囊腫：頤舌骨筋上に位する

尚荻崎は v. Berhmann 分類法により猶口腔内より頤下部に亘る巨大なるものに於ては之に対し舌頤下部皮様囊腫を追加す。

本症の治療法として外科的に経口法及び口外法で又

両者の併用で摘出が最も望ましい事であり、本症例は口内法で全摘が出来た。

結 語

我々は 8 才の男児で何ら発語障害を伴っていない口腔底皮様嚢腫の 1 例を試験し、全摘が出来たので併せて文献的考察を試みた。

(欄筆するに当り、御指導御校閲賜った横尾教授に深甚な謝意を表します。)

参 考 文 献

- 1) v.Bergmann d. Küttner H; Handbuch der praktischen chirurgie Bd I
- 2) Cererbaum: Beiträge zur klinische chirurgie Bd 88 (1914)
- 3) Colp: Surg gynae col. a obstetr Vol.40 No.2 (1925)
- 4) 江崎嘉秋:耳鼻と臨床, **5**, (3), 178 (1959)
(小池初雄, 金光 朗)
- 5) 衛藤 敏:日本医科学会雑誌, **24**, (8), 1097 (1923)
- 6) Hassel: Beiträge zur klinische chirurgie Bd

83 (1913)

- 7) 稲守浩一郎:耳鼻咽喉科臨床 **50**, (7), 622(1957)
- 8) 北村 毅, 米倉英明:日本耳鼻咽喉科会報 **61**, (2), 321 (1958)
- 9) 水河忠敬:耳鼻咽喉科臨床 **42**, (11), 219(1949)
- 10) 中沢忠夫:日本耳鼻咽喉科会報 **41**, (9), 1144 (1935)
- 11) 国見正明:耳鼻咽喉科 **27**, (7), 391 (1954)
- 12) 大石力三郎:日本耳鼻咽喉科会報 **53**, (11), 395 (1950)
- 13) 岡本正規:日本耳鼻咽喉科会報 **54**, (2), 86 (1951)
- 14) 千田千尋:日本耳鼻咽喉科会報 **55**, (9), 733 (1952)
- 15) 惣路照通:外科領域 **1**, (9), 777 (1953)
- 16) 西藤 弘:日本耳鼻咽喉科会報 **60**, (4), 451 (1957)
- 17) 高田 士:日本耳鼻咽喉科会報 **52**, (3), 92 (1949)
- 18) 立木 豊:手術 **4**, (9), グラフ 16 (1950)
- 19) 東条忠弘:日本耳鼻咽喉科会報 **59**, (8), 1476
- 20) 吉野清保:耳鼻咽喉科 **24**, (5), 222 (1952)
- 21) 山本 伸:耳鼻咽喉科臨床 **48**, (3), 181 (1955)

不連続線通過に際しての血中エオジン嗜好細胞の消長

本 蒲 田 診 療 所

小 川 静 男

Shizuo Ogawa

日本医科大学生理学教室

豊 島 恒 道

Tunemichi Toyoshima

本 蒲 田 診 療 所

河 崎 良 徳

Yoshinori Kawasaki

緒 論

気象変動が種々の影響を生体に与えることは遠くヒポクラテス当時より知られて居り、従つて此の方面の研究は実に夥しい数に上つて居る。此等の研究は生体側については血圧¹⁾、皮膚毛細血管²⁾等に対する変化を追求したり又古くは種々の疾病の発症死亡³⁾等について行われた。

又気象変化については気圧、気温等や、嵐、フェーン現象、雷雨等を目標としていた。しかし此等の研究は疾病や個体の生理状態のあるものと、気象要素の個々のものとの相関々係を見ると言う方向のものが大部分で明解な結論に達しているものは少なかった。

Blummenfeld⁴⁾, F. Linke⁵⁾, de Rudder⁶⁾, W.F. Petersen⁷⁾等が出るに及んで、気象変化を個々の要素に分析しないで、不連続線通過(前線通過)を目標にして、この時に起る生体側の変化、疾病の発生を見て行く方法が行われてのち、この方面の学問は長足の進歩を見た。例えば血圧の変動に関して Illénji⁸⁾は健康者でも前線通過日にその大多数が影響を受け、此等は温暖前線でも寒冷前線でも同様であると言い、Regliと Stämpeli⁹⁾も気象変化時には、毛細血管の透過性が高まることを詳細な研究から見ている。

しかし、此等は統計的方法を用いては居るが適当に抽出した値を並べて、直感を基として論述しているも